

# 留学生宿舎から混住型学生宿舎へ

— 教育寮への転換に向けて —

## From a Foreign Students Only Dormitory to a Mixed

## Dormitory:

## Transitioning towards an Educational Facility

明治大学大学院国際日本学研究科博士後期課程 吉田 千春

YOSHIDA Chiharu

(Graduate School of Global Japanese Studies, Meiji University)

キーワード：混住寮、教育寮、外国人留学生宿舎

### 1. はじめに

現在、大学の国際化が世界的に進展し、日本においても多様な留学生の受け入れを始め、国際的な学びの環境作りが求められている。その一つとして、日本人学生と留学生が共に生活をする混住型学生宿舎（以下、混住寮）が、グローバル人材を育成する場として注目されている（リクルートカレッジメント、2013）。2014年度の「スーパーグローバル大学創成支援事業」（文部科学省）の構想調書には、「混住型学生宿舎の有無」を記載する欄が設けられており、混住寮への関心が高まっている。今回「スーパーグローバル大学創成支援事業」に採択された37大学の構想調書においても、ほぼ全大学が、「混住寮の新設」、「既存の留学生宿舎の混住型への転換」、「既存の混住寮の定員数の拡大」の3つのいずれかを計画案として挙げており、今後混住寮が急速に増加することが予想される。

平成25年度私費外国人留学生生活実態調査（独立行政法人日本学生支援機構）によると、留学後の苦勞では、「物価が高い」（74.5%）、「日本語の習得」（30.6%）、「日常生活における母国の習慣との違い」（27.8%）に続き、4番目に「宿舎等を探すこと」（21.6%）が挙げられている。このことから、宿舎については、現在も依然として負担を感じている留学生が多いことが分かる。

日本の留学生 30 万人計画の施策では、平成 26 年度の報告書<sup>1</sup>において、宿舎は留学生が日本を選択する際の最も重要な要素の一つとされている。そして、より多くの優秀な外国人留学生を確保するために、「質と量を兼ね備えた住環境の整備が必要不可欠であること」、「外国人留学生と日本の学生等や地域住民との交流が重要であること」が明記されている。この機会に、混住寮だけではなく、総合的な住環境の整備を行うことが望まれる。

筆者は現在、混住寮の「学び」をテーマに研究を行っている。そのきっかけとなったのは、所属していた大学の留学生別科において短期留学生のクラス担任を約 7 年間経験し、寮生活が学生に与える影響が大きいと実感したからである。日本語習得が極めて良かった学生達は、寮生活を満喫しており、日本の留學生活にも高い満足感を感じていた。一方、問題を抱えていた留学生からの相談内容の多くは寮生活の問題であった。寮生活の相談は多文化環境における人間関係、異文化適応、差別・偏見などと関連しており、精神的なダメージを受ける学生も多く見られた。留学生寮と混住寮は、従来の日本人学生のみをの寮とは異なり、「多文化生活環境」という特徴を有しており、専門的なスタッフの介入のもと、適切に寮を運営する体制を整えることが重要であると痛感した。玉岡（2004）は「留学生の生活実態調査」を分析した結果、住環境は日常生活に影響し、それが大学の授業・研究にも強く影響するという間接的な因果関係が見られると指摘している。

また、混住寮は留学生のみならず日本人学生にとっても、留學に代わる「寮内留學」を実現する場として期待が高まっている（リクルートカレッジマネジメント, 2013）。しかし、グローバル人材が求められる国際社会の動きとは反対に、日本では内向き志向の学生が増えていると言われており、留學する学生が減っている。その他、就職活動または経済的な問題から留學を諦める学生もいる。このような学生に対し、混住寮の生活を通して留學の効果を得ることが期待されている。「スーパーグローバル大学創成支援事業」の構想調書の中で、「海外留學・インターンシップ」を必修としているコースの学生に対し、今後は長期留學が困難な場合は混住寮に入居し、寮の活動に参加することで単位認定を認めるとしている大学もあり、新しい動きが見られている。

以上のように、現在、混住寮は「生活の場」としての寮から「教育の場」としての寮へと転換が求められているが、「教育寮」とは何かという定義はまだ十分に議論されていない。そこで、本稿では、大学の教育寮の歴史を海外の例を参考に概観し、国際化に向けた韓国の新しい教育寮の事例を見て、日本における混住寮の現状を分析することで、今後どのような混住寮が必要かを考察する。

## 2. 大学の教育寮と国際学生宿舎の歴史

### (1) 大学の教育寮<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 「留学生 30 万人計画の実現に向けた留学生の住環境支援の在り方に関する検討会報告書」（平成 26 年 7 月 31 日）

<sup>2</sup> この部分は主に Allan 他（2013）「MILESTONES IN CAMPUS HOUSING」の内容をまとめたものである。

教育的意義のある大学寮で、近年の最も古い例はイギリスのオックスフォード大学とケンブリッジ大学の Residential College である。これらは、学生の教養教育に焦点を当て、教授・チューター・学生が共に生活し、学び、集会に参加するなど、教室の中と外の学びを統合させることを目的としている。寮は家庭的な付き合いを育むとともに学生達の社会化の場でもあった。このオックスフォードとケンブリッジの Residential College は最も初期の Campus Housing の原型となったもので、現在の Residential College にも大きな影響を与えている。アメリカではこのイギリスの例に基づき、ハーバード大学で最初に Residential College が取り入れられ、アメリカの高等教育の最も良い例とされた。

アメリカでは南北戦争後、ドイツの教育システムがアメリカの高等教育に大きな影響を与え、寮はただの居住施設となり、また、財政的な問題からも大学が寮を提供することができなくなったことで、Campus Housing 自体が一時期衰退した。しかし、19 世紀後半になると、女性寮の建設の必要性和キャンパスに近い寮の必要性を訴える学生の要望などから、再び寮の建設が急増した。このように様々な歴史的な影響を受け、Residential College はしばらく衰退の時期を迎えたが、1990 年以降に小さな復活を遂げ教授達と一緒に住む形態が再起した。これにより、教授達との相互交流が拡大し、学術的な関心と思考が高まることにつながっている。現在もアメリカの大学では教授達が寮に住む大学のプログラムは数十存在している。また、Residential College はアメリカ以外にもオーストラリア、カナダ、ヨーロッパなどで取り入れられており、様々な形式で取り組みが行われているが、近年、アジアにおいても韓国、シンガポール、香港などの大学で導入され始めた。

## (2) インターナショナルハウス（国際学生宿舎）<sup>3</sup>

アメリカのインターナショナルハウスは 1924 年にニューヨークに創設された「ニューヨーク・インターナショナルハウス」が最初である。この創設は、当時 YMCA の職員であったハリー・エドモンズが孤独な中国人留学生と遭遇したことがきっかけとなっている。彼は留学生とアメリカ人学生の相互交流と相互理解を深めるために、共同生活の場を創設する必要性を強く感じたことから、ロックフェラー財団から 300 万ドルの寄付を受け、留学生とアメリカ人学生が半分ずつ入居する 500 人規模のインターナショナルハウスを建てた。その後、このインターナショナルハウスはアメリカ、オーストラリア、イギリス、台湾などにも開設されている。国際学生宿舎は、アメリカなどでは既に 100 年以上の歴史を持ち、開設当初から国際的な相互理解を深めるための混住寮としての意義を備えている。

一方、日本の国際学生宿舎は、留学生 10 万人計画にともない国立大学を中心に建てられたが、留学生のために安価な居住を確保することを目的に建てられたため、現在においても留学生のみの寮が主流となっている。

<sup>3</sup> この部分は主に『留学生アドバイザー』の第十章第二節を参考にまとめたものである。

### 3. 韓国の延世大学における Residential College の取り組み

韓国は留学生政策として「Study Korea Project」を掲げ、国全体として国際化への取り組みを積極的に進めている。中でも韓国のトップ大学の一つである延世大学は、4割の授業を英語で行うなど大学の国際化に力を入れている。2013年度からは初年次教育として、「学び」と「生活」が一体化した環境を作るため、大規模なResidential Collegeプログラム（以下、RC）を本格的に開始した。筆者は2015年3月に延世大学インターナショナルキャンパスのRCプログラムを視察し、キャンパスと寮の見学及びRCの担当者からのヒアリングを行った<sup>4</sup>。次に、延世大学の視察調査と「2015 Residential College Guidebook (ENGLISH VER.)」を基に、韓国のRCプログラムの先駆的な試みを紹介する。

#### (1) RC について

1年生は全員、延世大学インターナショナルキャンパスで学び、キャンパス内の寮に入ることが義務付けられている。寮はそれぞれの特徴を持った12のハウスからなる。

RCの教育目標は、融合(convergence)、コミュニケーション(communication)、文化的多様性(cultural diversity)、創造性(creativity)、リーダーシップ(christian leadership)の5つのCを育む幅広い教育を提供することである。生活と学習を一体化させ、多様な文化・言語的背景を持った学生達と教員達との活発なコミュニケーションを促し、主体的に活動することで、学生達が創造的なイニシアティブを持つことを可能にする。また、学生達は授業からの情報を様々なRCのプログラムに応用することによって、教室の外と中の連携を実践している。

#### (2) RC の施設

寮はキャンパス内にあり、ドミトリー1と2の二つの建物に分かれている<sup>5</sup>。学生達は一部屋を2人または3人でシェアしており、各部屋には洗面所とシャワーが設置されている。食事は寮内の食堂で提供され、「Korean」と「International」の2種類から選択する形式となっている。1食ごとに課金されるシステムだが、寮内には共有キッチンもあるため自炊も可能である。共有スペースも充実しており、大小複数のロビー、ラウンジ、セミナールーム、コミュニティルーム、フェロウシップルームなどがあり、目的に合わせて集まることが可能である。また、自習室、マルチメディアラボ、お祈り室、卓球ルーム、ビリヤードルームなども設けられており、学生達が必要に応じて自由に使うことができる。

<sup>4</sup> この視察は2014年度明治大学「新領域創成型研究助成」（代表：田中友章）の助成を受け、実施した。

<sup>5</sup> ドミトリー1に6つのハウス、ドミトリー2に6つのハウスが入っている。

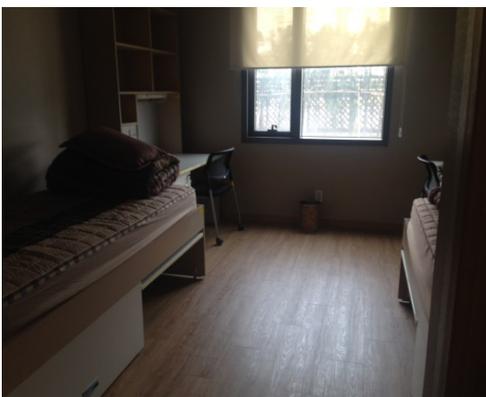
【寮の外観】



【寮の食堂】



【居住スペース(2人部屋)】



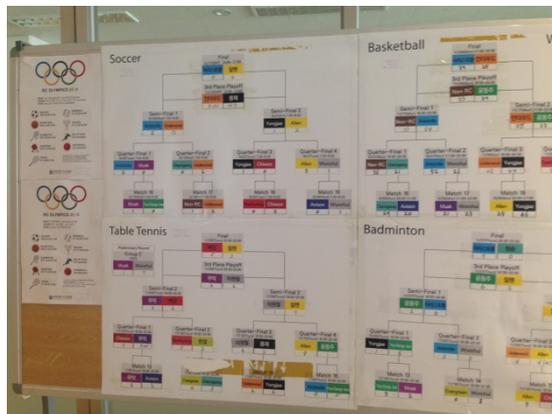
【共有スペース:ラウンジ】



【共有キッチン】

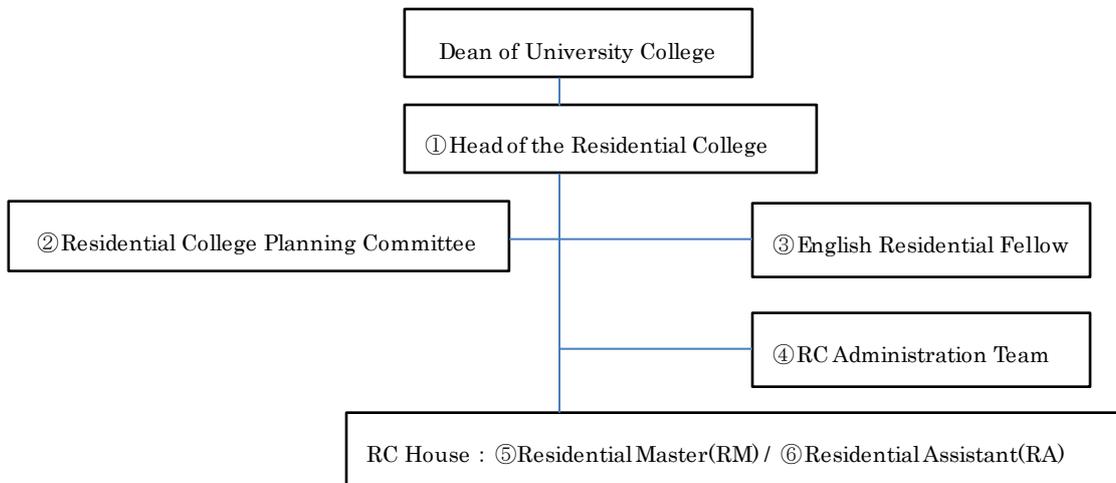


【RCオリンピックの結果】



### (3) RC の組織

延世大学の RC の組織は次のようになっている。



- ①Head of the Residential College は学長の下に置かれ、RC の 12 のハウスの全ての管理、運用を行う責任者であり、プログラムの承認や予算の割り当てなどを総合的に行っている。
- ②Residential College Planning Committee はカリキュラムを設計し、RC 教育の組織と予算などを評価する役割を担う。同時に RC の規律を定め、学生に様々なペナルティーを課す。
- ③English Residential Fellow は寮における英語でのリーディングやディスカッションなどの授業、料理教室や美術などのインフォーマルなプログラムを実施することによって、韓国人学生と留学生をつなぐ役割を果たす。また、留学生に対して日常の学びと生活を支援する。
- ④RC Administration Team は RC のサポート、予算レポートなどの RA に関する大学内外の全ての問題の解決に対応する。
- ⑤Residential Master (RM) は各担当ハウスの管理、運用を行う責任者であり、学生達の学びを支援し、個人的かつ学術的支援を行う。また、RA の選抜、トレーニング及び評価の役割を担う。
- ⑥Residential Assistant は優秀な成績と人望を兼ね備えた大学生か大学院生である。学生達と共に生活し、学習しながら経験とトレーニングに基づき学生達への様々なサポートを行っている。また、RM と一緒にハウスプログラムを企画・実施し、学生達の緊急事態の際のサポートも行っている。

### (4) 12 のハウスについて

延世大学は 12 のハウスがあり、それぞれ独自のテーマと特徴を持っている。各ハウスの特徴を簡単に紹介する。

NO	ハウスの名前	ハウスのテーマと特徴
1	EVERGREEN HOUSE	テーマ:「精神的な価値観をつくり上げること」 ※文系と自然科学のスキルを兼ね備えた博識で豊かな学生を育成する。
2	WONCHUL HOUSE	テーマ:「夢の種から世界のスターへ」 ※他の学生達とともに、才能と情熱を共有する。
3	UNDERWOOD HOUSE	テーマ:「パイオニア精神と(新しい)延世スタイルの確立」 ※仲間と互いに考えを共有することを重要視し、チャレンジ精神、創造性を育む。
4	YUN, DONG-JOO HOUSE	テーマ:「家庭のような強い帰属意識と文化的、芸術的、感受性の促進」 ※コミュニケーションスキルを高め、リーダーシップ力を養う。
5	MUAK HOUSE	テーマ:「チャレンジ精神・成長・調和」 ※様々な活動を通して、学術的生活と非学術的生活(スポーツ、音楽など)を楽しむ。
6	CHI WON HOUSE	テーマ:「パイオニア精神」 ※開拓精神、思いやり、勇気、倫理を持つ学生達を育てる。
7	YONGJAE HOUSE	テーマ:「誠実・自由・調和」 ※人道主義的な精神とグローバルコミュニティにおけるグローバルリーダーを育てる。
8	AVISON HOUSE	テーマ:「学びと実践と協働を通じたリーダーの育成」 ※誠実さと開拓精神を持って韓国で活躍したDR.Avisionのような人材を育成する。
9	BAEK YANG HOUSE	テーマ:「創造的なリーダーとしての成長」 ※読書と思想を重視し、コミュニティ精神を養い、次世代の創造的なリーダーを育成する。
10	CHEONGSONG HOUSE	テーマ:「毎日の新しい取組」 ※互いを愛し、互いから学び、自分と周りの環境に対してケアができる学生を育てる。
11	ALLEN INTERNATIONAL HOUSE	テーマ:「グローバル、多文化、多様性」 ※多様性を促進し、真のグローバルコミュニティを作る。(RAは全員バイリンガル)
12	ARISTOTLE INTERNATIONAL HOUSE	テーマ:「グッドライフ(The Good life)」 ※多様な文化背景の学生と多様なプログラムに参加し、よく学び、よく遊ぶ。

### (5) RC プログラム

RCのプログラムは「全体プログラム」と「ハウスプログラム」の2種類がある。「全体プログラム」は、講義やプレゼンテーションコンテストなどの「アカデミックイベント」、コンサートやコンテストなどの「アート&カルチャーイベント」、RCオリンピックやマラソン大会などの「スポーツイベント」の3種類からなる。また、「ハウスプログラム」は各ハウスのテーマが実現できるようにデザインされており、全てのプログラムは創造性・リーダーシップ・学生の共感力を育成することを目的としている。例えば、「ALLEN INTERNATIONAL HOUSE」の2015年のハウスプログラムは次の通りである。

プログラム名	内容	実施回数	責任者
ALLEN ナイト	大学を知り、仲間との関係作りのため、交流パーティーをする。	1セメスターに2回	RA
ALLEN ジョギング	健康と記憶力のために、朝食の前に軽いジョギングをする。	1週間に3回	RA
ALLEN ムービーナイト	勉強から心を開放し、仲間と楽しむため、夜に映画鑑賞をする。	1週間に1回	RA
ALLENトーク トーク!	RAが学生達に関心の高いトピックについて語る。	1カ月に1回	RA

以上、延世大学の RC プログラムについて紹介した。まだ開始して数年のため、教育効果については明らかにされていないが、ヒアリングの際は、学生の満足度は高いとのことであった。日本でも初年次教育の一環として寮生活を取り入れている大学もあり、今後の教育寮のあり方の一つの参考になると考えられる。

#### 4. 日本の教育寮の例

筆者は2014年9月～2015年8月にかけて、RA組織などがあり、教育的目標を掲げ様々な活動を行っている国内の6つの大学の混住寮を視察し、ヒアリング調査を実施した。ここでは、特に先駆的な試みを行っている「APハウス（立命館アジア太平洋大学）」と「こまち寮（国際教養大学）」の事例を紹介する。APハウスは約60カ国・地域の学生が集まる多文化生活環境の中で、約1,200人の学生が共に生活しており、日本では最大規模の混住寮である。また、こまち寮は寮生活を国際教養教育の一部とし、初年次教育の一環として1年生全員の入寮を義務付けている。

##### (1) APハウス（立命館アジア太平洋大学）<sup>6</sup>

###### ①APハウスの概要と特徴

立命館アジア太平洋大学では、90年代後半に大学設立を計画した時に「3つの壁」があった。それは、「留学生の日本語」、「財政」、「留学生の住居」である。その改善の一つとして混住寮としてのAPハウスが設立された。居住者はAPUの留学生と日本人学生で、留学生は1年次の入寮が義務づけられている。一方、日本人学生に対しては、入学前に入寮希望を聞き、入試の際の面接などを参考に入居者を決定する。日本人学生の入寮希望は多いが、入居できるのは希望者の半数程度である。寮の留学生と日本人学生の割合は留学生が66%、日本人学生が34%である(2013年3月現在)。

APハウスは1と2に分かれており、1999年、2000年に個室使用のAPハウス1(425名)とAPハウス2(477名)が建設され、2007年に部屋を仕切ることができるシェア棟(189×2=378名)が建設された。APハウスの特徴は寮担当の職員が複数いることである。現在、6名の専門の担当職員がRA担当、教育プログラム担当などに分かれて教育的意義のある寮をつくりあげている。また、寮の運営、プログラムの企画、RAの選考、RA研修などに、教員が携わっている部分もある。

###### ②レジデントアシスタント（以下RA）の概要と特徴

大規模な寮の管理・運営は、APハウスでは教職員の他に、RAとよばれる学生組織の協力のもと行っている。APハウスのRAは64名で、代表1名、副代表2名、棟のリーダー6名を配置している。RAは一つのフロアに2名配置(国内生1名、国際生1名)され、フロアマネジメントを行っている。RA

<sup>6</sup> APハウスについてのヒアリングは2014年9月8日に実施した。

の選考は教職員の面接で選考され、奨学金は月2万円である。

RAの役割は主にフロアマネジメント（担当フロアの寮生のサポート、交流促進、管理など）と寮全体の管理・交流促進である。寮の運営を行うために、RAは毎週1回のRA会議への参加が義務付けられており、月に1回のフロアミーティングの開催、寮内で行われるイベントの企画、ゴミの分別チェックなどの役割を担う。RA会議などは全て日本語と英語の2言語で行われている。RAの活動を円滑に行うために、RA開始時に1泊2日の合宿を含む約1週間の研修があり、RAの心得、問題への対応の仕方などを学ぶ。寮全体で1セメスターに寮生から集めた約120万円（1人1,000円×1,200名）のイベント資金があり、それをRAが運用し、様々な規模のイベントなどを行い、寮内の交流を促進している。

## (2) こまち寮（国際教養大学）<sup>7</sup>

### ①こまち寮の概要と特徴

こまち寮は大学の理念であるグローバルな社会・地域社会に貢献する人材を育成するため、1年生の義務寮として設置されている。建物自体はミネソタ州立大学秋田校時代の寮を改装して使用しており、新設したものではない。最初は1名1室の使用であったが、学生数の増加に伴い、2名1室のシェア型になった。こまち寮の居住者は新入生、RAの学生（2年生以上）、交換留学生等である。国際教養大学では、学部正規生として入学する留学生は少なく、この寮に住む留学生の多くは交換留学生である。

こまち寮の特徴は、仕切りなしのルームシェアで、約7.5帖のスペースを2人で共有することである。限られたスペースでの共同生活はストレスやトラブルもあるが、最初にルームメイトやスイートメイトで、ルーム/スイートコントラクトを作ることで、トラブルを防ぐ、或いはトラブルを軽減することができる。また、国際教養大学では、1年間の留学が義務付けられており、どのような環境でも適応できる力を育成するためにも、ルームシェアを推進している。さらに、現代は一人部屋で育ってきている学生が多いため、ルームシェアを体験し、スペースを他学生とシェアする経験を重要視し、大学側としては寮が様々な学びの場となることを期待している。

### ②RAの概要と特徴

2014年度のこまち寮のRAは8名で、月に2万円（こまち寮1カ月の家賃相当）の補助を受けている。RAの選考は書類審査と面接の2段階で、英語と日本語のコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、1年間RA業務を継続できることを重視している。RAのほとんどは日本人学生であるが、学部や大学院の留学生が1~2名、RAとして参加することもある。

RA制度は2005年度から開始しているが、2013年度より大幅にプログラムを改変し、1月から3月

<sup>7</sup> こまち寮についてのヒアリング調査は2015年2月18日に実施した。

にかけて RA リーダーシップ養成期間として、20~25 時間のトレーニング講座を行っている。主な内容は教授による「リーダーシップ論」、カウンセラーによる「自分の気付き、話の聞き方、相談対応」、看護師による「病気、緊急時対応」、ケーススタディとして「ルームメイトとの問題対応等」、学生が実際に企画を立てる「活動プランニング、企画・運営」などで、実践的なプログラムを実施している。3月の後半は9時から17時まで、事務局学生課とともに新生受け入れの準備をしており、共同作業を通して RA 同士の結束を強めるとともに、実践の準備期間としている。

2014 年度のこまち寮 RA はボランティアの Floor Representatives (以下 FR) とともに、同じフロアに住む約 30 人の支援を行う (RA1 人+FR2 人)。RA の役割は寮生の管理、寮生同士の交流促進、寮生のサポートなどである。学生課と RA 全員で行う RA 会議への参加 (週 1 回)、担当フロアの学生達のフロア会議 (適宜)、夜 10 時以降に交代で見回りをするパトロールなどの役割も担う。こまち寮及び学生宿舎 (学内にあるアパート) の RA は 1 年間 20 万円の予算を運営し、フロアや宿舎のイベントなどを積極的に企画し、寮内及び学内居住者との交流を促進している。

## 5. 「教育寮としての混住寮」を考えるために

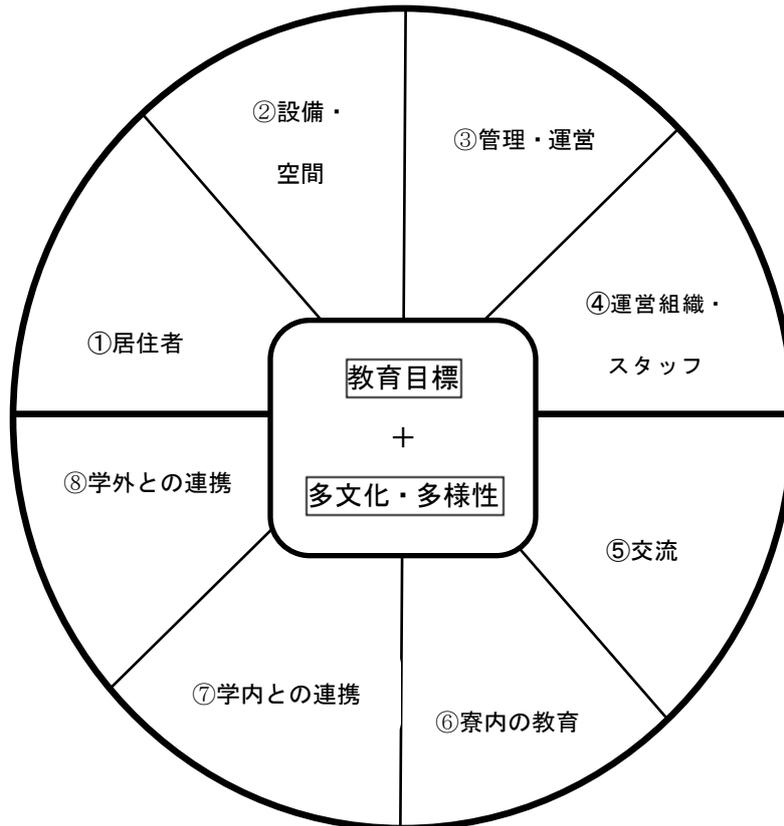
前述した「AP ハウス」と「こまち寮」のように、日本でも教育的意義のある混住寮が増えてきたが、「教育寮としての混住寮」の検討はまだ始まったばかりである。では、今後増加する混住寮の教育的意義、効果を検討する際に、どのような観点について考える必要があるだろうか。筆者がこれまで実施した混住寮の調査結果 (寮の視察、教職員へのヒアリング、RA 学生へのインタビュー)、先行研究、スーパーグローバル大学創成支援に採択された 37 大学の構想調書などを参考に、今後の「教育寮としての混住寮」のあり方について考察する。

### (1) 「教育寮としての混住寮」のデザインに必要な 8 つの観点

「教育寮としての混住寮」を考えるにあたっては、まず、寮でどのような学びを創出し、どのような人材を育成したいかなどを明確にし、「教育目標」を設定することが重要である。次に、その教育目標を実現するために、図 1 で示した 8 つの観点について考える必要がある。図 1 の①~④は寮の運営を行う上で必要な項目であり、従来の居住のみを目的とした寮は、この 4 つの観点が中心に考えられていた。しかし、「教育寮」としての機能を考える場合は、図 1 の⑤~⑧に挙げた観点を取り入れ、寮における学びのデザインを新たに検討することが求められる。また、混住寮は多様な言語・文化背景を持つ居住者が集まる特徴を有するため、全ての観点において「多文化・多様性」を考慮する必要がある。

次に、図 1 で示した 8 つの観点 (①~⑧) について、具体的な検討課題を挙げる。

図1：教育寮としての混住寮のデザインに必要な8つの観点



## (2) 8つの観点における具体的な検討課題

### ① 居住者

まず、居住者を考えることで、寮の運営、デザインが大きく変化する。留学生と日本人学生以外に、教職員の同居の有無、管理人の有無などを検討する必要がある。特に、海外からの研究者や大学院生、教職員を受け入れる場合は、既婚者のケースを考え、家族部屋の設置などの設備面も検討の対象となる。

次に、居住者の割合である。現在、混住寮と言っても、日本人学生と留学生の割合は様々である。留学生と日本人学生の割合が半分半分の寮もあれば、留学生寮に数名のRAの日本人学生が同居している寮もある。教育的視点を考えると、今後は何を基準に混住寮と定義するのかを検討することも必要であろう。

また、留学生を受け入れる場合は、居住者の多様性にも目を向けなければならない。例えば、宗教上、男女のフロアを分けたり、食事を考慮する必要がある。今後はLGBTの学生に対する配慮も重要になるであろう。さらに、学年によって門限や飲酒の規則などに違いが生じる。このように、居住者によって設備、管理、運営面に配慮が求められる。

### ② 設備・空間・環境

教育的営みを持つ混住寮が教育効果を最大に発揮するには、教育内容、教育方法、運営方法などを

考えた上で、それを可能とする空間や設備を提供することである。これから新設する場合は、教育的視点と建築学的視点を融合させ、ソフト面からハード面を考えることでさらなる教育効果を生み出すことが期待される。

寮生活では他者との交流が重要であり、交流を生み出す共有スペースについては特に検討が必要である。日本では、食事の提供がない寮も多く、その場合共有キッチンが大切な交流の場となる一方、キッチンの使い方、冷蔵庫の中身の持ち出しなど様々な問題が起こる場でもある。共有キッチンに関しては、冷蔵庫、炊飯器などの備品をどこまで共有にするのか、備品の設置や移動などの点も含めて考慮することが重要である。また、ラウンジなどの学生が集まる共有スペースも交流を促進する大切な場となる。APハウス（立命館アジア太平洋大学）は、1階にビリヤード台、卓球台、畳のスペースなどがあり、自然と出合いのチャンスを生み出す場となっていた。その他、共同風呂の設置など、居住者が多面的に出会うことのできる空間作りが望まれる。さらに、セミナールーム、会議室だけではなく、最近は音楽室などを設置しているところもあり、キャンパス内の寮かキャンパス外の寮かによって、必要な設備を検討する必要がある。

また、居住スペースである部屋の形式は、時代に伴い変化しており、現在、「個室型」・「ルームシェア型」から個室＋共用スペース（キッチン、ダイニング、バス、トイレなど）を一つのユニットとする「シェアハウス型」が増加している。「シェアハウス型」の多くは3～8人単位で一つのユニットが組み立てられているが、このユニットの単位も人数によってどのようなプラス面とマイナス面があるのかはまだ明らかにされていない。今後は教育効果が高い人数や空間を検討することも重要である。

### ③運営組織・スタッフ

混住寮の適切な運営のためには、専門的なスタッフによる体系的な組織作りが重要である。特に、教育的効果を生み出すには、職員のみではなく、教員が積極的にに関わり、教育プログラムやRAの研修プログラムの開発などに携わることが不可欠である。また、留学生の増加とともに、多様な言語・文化背景を持った学生達が増加すると考えられるため、多文化・異文化間教育に精通した専門スタッフの配置、グローバル人材としてのロールモデルとなる人材の配置などが望まれる。さらに、混住寮の運営に関わるスタッフは全員、基本的な異文化間教育に関する研修を受け、言語・文化の異なる学生だけではなく、障がいを持った学生、精神的な問題を抱えた学生などへの対応についても一定の知識と理解を持つ必要がある。なお、寮の運営組織やシステムを客観的に評価するシステムも必要である。

### ④管理・運営

寮は生活する場であるため、安全性や危機管理への対応が重要であるのは言うまでもない。大学によって管理体制は様々であり、同じ大学の寮でも、寮ごとの特徴にあわせて門限、寮のルール、飲酒

の制限など、異なる設定をしている大学もある。教育寮を考える場合、管理的な視点が強すぎると学生達の自由度が減り、交流が阻害されたり、主体的な行動や創造性が生み出されなくなることもある。寮の教育目標にあわせて、管理と自主性のバランスを検討することが求められる。

## ⑤交流

混住寮において最も重要なことの一つは、他者との交流を創出し、関係を深める仕組みであろう。筆者のRAへのインタビュー調査からも、「何もしなければ、留学生と日本人学生が完全に2つのグループに分かれてしまう」、「寮に住めば知り合いの留学生は増えるが、留学生と深い友人関係を築くのは難しい」などの声が聞かれた。寮内の交流を生み出すには、「日常生活の交流」から「寮全体の交流」について考える必要がある。特に重要なのが、交流をどの単位で生み出すかである。まず、「ルーム・ユニット単位」、次に「フロア単位」、「棟単位」、「寮全体」と広げていくことが重要であり、この役割を担うのがRAである。RAが寮内において、交流を生み出し、深める工夫がなければ、日常会話や浅い関係に留まり、良いコミュニティは生まれまいであろう。寮生が寮に愛着を持つには、帰属意識が不可欠であり、生活を共に過ごすという特徴を活かし、家族のような関係を築けるかがポイントとなる。

## ⑥寮内のプログラム

寮生活は全人教育とも言われ、寮内で他者と協働作業を行ったり、様々なセミナーやプログラムを開くことで、教育効果を高めることが可能である。前述した韓国の延世大学でも、寮独自のプログラム（「寮全体のプログラム」と「ハウス独自のプログラム」）が多数実施されており、延世大学では参加するとポイントを獲得するという制度が設けられていた。また、国内では、2015年度から国際教養大学で、共同生活をする学生たちが主体的に学修することを目的に、「テーマ別ハウス群」が導入された。2015年度は、①Public Policy House（公共政策ハウス）②Grad Track House（大学院進学ハウス）③Japanese Arts and Culture House（Japan House：日本芸術文化ハウス（通称ジャパンハウス））を設置し、共通の目標を持った学生達が、寮内で共に学ぶ仕組みが作られている。

## ⑦学内（アカデミック）との連携

前述したように、Residential Collegeの目的は教室の外と中の教育を融合することであり、大学教育を考える上で専門分野の学びと寮生活の連携も重要となる。現在、日本では大学の寮に教授が学生と共に住む例はほとんど見られないが、このような視点を取り入れることも今後必要であろう。

また、欧米ではLiving Learning Community（以下、LLC）という寮を基盤とした学習共同体を作り、大学の授業と寮を連携するプログラムが実践されており、一定の評価を得ている。これは、例えば、

寮で同じユニットに住む学生達が、授業においても同じグループで活動をするといったことである。日本でも国際基督教大学が今後の取り組みとして LLC の概念を導入するとしている。今後はさらに学内との連携を考える視点が重要になるであろう。

### ⑧学外（地域、企業など）との連携

国の施策でも地域との連携の重要性が指摘されていたが、地域や企業などとの学外との連携も考えなければいけない点である。地域との連携では、寮の学生達が小・中学校に訪問したり、地域の活動に参加したり、逆に地域の人が寮のイベントに参加する取り組みなどが既に行われている。しかし、単発の企画では形だけの交流に留まってしまうため、継続的かつ地域の一員として活動をする仕組みを考えることが大切である。また、これから社会に出る学生達にとっては、企業との連携も重要である。現在、企業の寮に留学生が入居し、留学生のキャリアアップと社員の国際化を育む取り組みや、反対に、企業の研修生を混住寮に受け入れる取り組みなどが行われており、今後、企業との連携は様々な可能性を秘めている。

学内に寮がある場合は 24 時間学びの場というメリットもあるが、一方、学内で全てが完結し、視野が狭くなるのではという懸念の声も聞く。学外とのつながりを持つことにより、学生達に広がりを持たせ、併せて地域や企業の活性化が生まれる仕組みができることが望まれる。

以上、教育的価値を生み出す混住寮を考える上で必要な観点について考察した。課題はまだあるが、今後は、多様な人との関係の構築、寮内・寮外の活動、制度、学びを促進させるキーパーソンなどのソフト面をどのように連携させれば学びが最大化するかを検討し、ソフト面を活かせる空間をデザインすることも重要である。

## 6. まとめ

混住寮の生活は、一緒に暮らす日本人学生、留学生、寮のスタッフなどとの相互作用が生じることにより、単に「生活の場」としてだけではなく、人間関係の構築、異文化適応、アイデンティティの形成、葛藤や異文化衝突を乗り越える経験などを通して、様々な「学びの場」となり得る。また、寮内のプログラムを充実させ、学内、学外との連携により教育効果が高まり、地域社会への貢献にもつながると考えられる。ただし、これらを実現するには、教育的介入や体系化したシステムが不可欠である。今後は、最適な運営方法を検討するにあたり、混住寮の研究や教育効果を検証することが求められる。

現在、筆者は「混住寮における RA の学び」についての研究を行い建築学の専門家との混住寮に関する共同研究も進めているが、全般的に混住寮の教育的意義に関する研究はまだ少ない。また、寮に関

する評価の視点も確立されていない。今後は様々な分野における混住寮の研究が増え、教育的価値を生み出す混住寮が増えることを期待する。

【参考文献】

1. 玉岡賀津雄(2004)「これからの留学生宿舎を考えるー広島地区の全留学生を対象とした調査データより」『留学交流』 p2-5
2. 横田雅弘・白土悟(2004)『留学生アドバイジング』ナカニシヤ出版
3. リクルートカレッジメント(2013)「特集 寮内留学」リクルートカレッジマネジメント 183, p4-32
4. Allan Blattner, Tony Cawthon, James A. Baumann (2013) MILESTONES IN CAMPUS HOUSING, *Campus Housing Management Past, Present, and Future Vol. 1*, Association of College & University Housing Officers
5. 2015 Residential College Guidebook, ENGLISH VER. YONSEI UNIVERSITY  
INTERNATINAL CAMPUS
6. 国際教養大学 学生寮と学生宿舎  
<http://web.aiu.ac.jp/campuslife/dormitory> (2015 年 8 月 30 日検索)
7. スーパーグローバル大学創成支援構想調書  
[http://www.jsps.go.jp/j-sgu/h26\\_kekka\\_saitaku.html](http://www.jsps.go.jp/j-sgu/h26_kekka_saitaku.html) (2015 年 8 月 30 日検索)
8. 留学生 30 万人計画の実現に向けた留学生の住環境支援の在り方に関する検討会報告書  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/26/08/\\_icsFiles/afieldfile/2014/08/29/1350840\\_01\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/08/_icsFiles/afieldfile/2014/08/29/1350840_01_1.pdf) (2015 年 8 月 30 日検索)